

目 次

外国語を学ぶときに大事なこと	今 本 幸 平 (1)
その頃を振り返って	飯 田 津喜美 (5)

外国語を学ぶときに大事なこと

法経科 准教授 今 本 幸 平

1. ドイツ語との出会い

冒頭から恐縮だが、私的なことから話を始めたい。

私がドイツ語を勉強しようと思ったのは高校一年生の冬だった。その年はモーツァルトという作曲家の没後200年記念の年で、モーツァルトを中心としたプログラムの演奏会がいたるところで開かれていた。またその模様を放映するテレビ番組も多く、その中には普段はなかなか見られないオペラも含まれていた。その中の『魔笛』というオペラをテレビで見たことが、ドイツ語を勉強するきっかけとなった。『魔笛』という邦題は何だか不気味だが、ドイツ語の原題は *Die Zauberflöte*、英語では *The Magic Flute* すなわち「魔法の笛」である。大雑把に言うと「さらわれた美しい娘を王子様が助けに向かい、魔法の笛の力を借りて困難を乗り越え、最後に二人は結ばれる」という童話のような筋書きだ。この音楽に感動し、録画して本当に毎日見ていたのだが、そのうち音楽だけでなく、台詞や歌のドイツ語にも魅力を感じ始めた。そしてこの言葉を理解したいと思うようになり、入門書と辞書を買ってきて手探りで勉強を始め、ドイツ語の世界に足を踏み入れたのである。

今思えば当時はかなり背伸びをしていた。文法も単語もろくに知らないくせに、いきなりカフカの『変身』などを原書で読もうとしていたのだ。ページの余白に単語の意味やら動詞の変化形やらが小さい字でビッシリ書き込まれたペーパーバックが今でも手元にあるが、書き込みは1ページ目で終わっている。どうやら無理があると気づいたようだ。

またNHKで放映していた「ドイツ語会話」という番組もよく見ていた。今では「旅するドイツ語」というタイトルに変わっている。当時は一年コースで、私が番組を見始めたのは12月。つまり4月に新番組が始まって、すでにコースの終盤に入っており、内容は結構難しくなっていたが、私はオウムのように、画面の中のドイツ人講師の発音を何度も真似ていた。そのおかげでいまだに覚えている例文がある。

Jeder Passagier, der ein gültiges Flugticket hat, kann sich entscheiden, ob er lieber mit dem Flugzeug, oder lieber mit dem Airport-Express nach Frankfurt gelangen möchte.

有効な航空券をお持ちのお客様はどなたでも、飛行機かエアポート・エクスプレスのどちらでフランクフルトへ行きたいか、選ぶことができます。

ちなみに「エアポート・エクスプレス」というのは、かつてルフトハンザ航空が空港の許容量や環境などの問題から近距離の国内線の便数を減らすため、ドイツ国鉄と連携して運行していた列車で、鉄道の切符ではなく航空券を持って乗る特別な列車である。

どうせ覚えるならもっと含蓄のある言葉を覚えればよかったと思うが、この文には関係代名詞、前置詞、比較級など色々な文法事項が使われていて、教材としてはなかなか良い文だ。しかし初心者には難しい。当時ドイツ語を始めたばかりでほとんど単語も知らず、当然日本人講師の文法解説も理解できなかったが、とにかくドイツ語の音が格好良いと思っていた（今でも思っている）私は、ほとんど何も分からぬまま発音を繰り返しては、ドイツ語の響きに酔っていた。

結局高校時代のドイツ語学習は、大学受験の英語に専念するために、一年ほどで中断した。しかし振り返ってみると、学び始めの時期に音読をたくさん行ったことは、後に大学でドイツ語を学ぶための下準備として大いに役立ったと思う。音読を通じてドイツ語の読み方に慣れることができたからである。

ドイツ語を教えるようになって思うことだが、授業中に学生を指名してドイツ語を読んでもらう時に、躊躇なく読み、たとえ解答を間違っても読み方には大きな誤りが少ない学生は、最終的には筆記試験でも好成绩を出す傾向がある。書いてある文字を理解する過程では、たとえ黙読でも「音韻符号化」（文字を音に変換する作業）が脳内で起こると言われている。音という要素は、会話や聴き取りだけでなく、読み書きでも、つまり語学の四技能全てにおいて不可欠なのである。言語はつまるところ音でできており、語学の四技能とは音のインプットとアウトプットの能力だからである。

2. 文字と音

文字というものが何のためにあるのか、皆さんは考えたことがあるだろうか。口から発せられた言葉（音声）は次の瞬間消えてしまう。そこで人間は言葉を文字で書き留めることを思いついた。そうすれば後から読み返したり、発言を直接聞いていない人にも情報を伝達したりできる。

文字の起源は紀元前4000年ごろに遡ると推定されているが、いわゆる「アルファベット」の起源は紀元前1000年ごろに地中海地域でフェニキア人が使っていたフェニキア文字と言われる。これをギリシア人が改良して、ギリシア文字（ $\alpha \beta \gamma \dots$ ）を作り、さらにそこから作られたのが、英語をはじめ多くの言語で使われているラテン文字（ $abc\dots$ ）である。アルファベットという文字は、音を表す「表音文字」なので、個々の文字自体に意味はない。I have a dog. のIやaのように一文字だけで意味をなす場合もあるが、それは偶然であり、Iという字が常に「私は」という意味を表すわけではない。

音を表すという点では仮名もアルファベットの仲間である（厳密にはアルファベットは音素

文字、仮名は音節文字という)。犬という語は「イ」と「ヌ」という仮名で表されるが、仮名自体に意味はない。一方、漢字は音と意味を両方表せる文字である。「犬」という字は「イヌ」という読み方(音)と同時に「イヌ科の哺乳類」や「権力の手先として他人の秘密を嗅ぎまわる者」という意味を表すことができる。

ラテン文字の話に戻ると、英語で「犬」という語は [d]、[ɔ]、[g] という三音ひとかたまりで [dɔg] となっている。そしてそれらの音に、d、o、g という三文字を当てはめて dog と表記する。言語音をどのように表記するかは、言語ごとに定められている。例えば英語で「英語」は English と書き、ドイツ語では Englisch と書く。似ているがつづりの末尾が英語では sh で終わり、ドイツ語は sch で終わっている。しかしこれらはどちらも発音記号で書けば [ʃ] (あえて仮名で書けば [シュ]) という同じ音を表す。同じ音がフランス語では ch、イタリア語では sc と表記される。また同じ言語でも、時代によって表記の仕方は変わる。例えばドイツ語圏では1996年にドイツ語の正書法(つづり方などの規定)が改訂され、移行期間を経て2006年から公的には新正書法が使用されている。要するに、言語の本質は音にあり、文字はその音を表すために、制度によって後づけされたものなのである。

外国語を学習する時には、その言語特有の「文字と音の関係」、つまり「どの文字がどんな音を表すのか」を理解することが重要なのだが、えてして音はないがしろにされがちだ。確かに学校の試験は筆記試験が多いので、読み方は二の次で、とにかく正しく書けるようにと、つづりと意味を覚えたい気持ちは理解できる。しかし「音を表し書き留めるために文字がある」ということを考えれば、読み方を理解している方が、学習効率が上がることは間違いない。頭の中に音声と、その音声を表す文字の対応関係が出来上がっていれば、読み方が分かれば音に文字を当てはめて、つづりを覚えられるからである。

私たちは普段日本語ではそれを自然とやっている。知らない言葉でも、聴けばとりあえず仮名で書くことはできる。これは音と文字の関係を理解できているからだ。未知の言語ではどんなにゆっくり明瞭に発音されても、聴いて書き取ることはできない。またロシア語のキリル文字やアラビア語のアラビア文字のように、文字の読み方が分からない言語の単語を覚えろと言われても、私自身は10個ですら覚えられる自信はない。文字はどんな音を表すのか分からなければ単なる模様に過ぎず、単語の見ただけで覚えるしかなくなるからだ。読み方をなおざりにして外国語を学習する人は、そんな苦行に近いことをしているのである。

ただ、文字と音の関係の明快さの度合いは言語によって異なり、仮名は音と文字の関係がほぼ一対一(a = ア、ka = カなど)なので覚えやすい。(その分漢字には読み方が複数あり、場合によって読み分ける必要があるのが外国語としての日本語学習者には大きな壁となっている)。それに対して英語やドイツ語ではその関係性が仮名よりやや複雑で、同じ文字でも違う音を表す場合がある。例えば英語もドイツ語も s という字は濁る場合と濁らない場合がある(英: books と days など)。

このように英語やドイツ語などでは、音とつづりの関係を理解するには仮名より時間が必要なので、読み方の学習は回り道のように思うだろうが、知らない単語に出会った時は読み方を知ることが最優先にした方がよい。読み方を知ってから意味やつづりを覚えるようにすれば、つづりや意味が音とともに頭に残り、読み方に自信がないままにいるよりも、記憶は定着しや

すくなる。再び日本語を例に出すが、皆さんが知らない漢字を見たとき、意味もさることながら（漢字の場合は意味を推測できることもあるが）、まず読み方が気になるのではないだろうか。読めても書けないという漢字はたくさんあるだろうが、書けるのに読めないという漢字はないはずだ。つまり書き方よりも読み方を先に覚えているのである（間違った自己流の読み方で覚える可能性はある。漢字の読み間違いは恥ずかしいこととされるが、これは外国語の場合も同じである）。このように漢字は読み方を先に覚えるのに、外国語では読み方を気にしない人が多いように思う。

3. おわりに

最後に読み方の学習方法について述べたい。これは端的に言って、音声を聴き、発音してみるのが一番である。特別なものは必要ない。最近の外国語の教科書には、ほぼ全てと言ってよいほど CD などの音声資料がついているので、これを活用すればよい。あるいは YouTube にも様々な語学動画があるので、自分のレベルと好みに合うものを探して視聴しても良いだろう。

音声を使った有名な練習法として、シャドーイングやパラレル・リーディングというものがある。シャドーイングは、文字は見ずに音声だけを聴き、ほぼ同時進行で音を追いかけるように発音する練習で、同時通訳者の初期の訓練でも行われるという。真似するだけなので簡単そうだが、発音しながら次の音も聴いていなくてはならず、見本の音声のスピードに合わせて発音するのは意外と難しい。そのため教材は語彙も構文も、簡単と思えるものを使用した方がよい。例えば、教科書の各課に出てくる例文のような短い文とか、文章ならばすでに授業で学習済みの、内容が分かっているものを一段落ずつ、場合によっては一文ずつ区切るなど、自分のレベルに合わせて調節する。聴いた音を即座に口で言う練習をすることによって、音声とともに語彙や構文が頭の中に定着し、聴き取りや読解の能力向上が期待できると言われている。

そしてシャドーイングと同じ要領で聴いた音声を発音しつつ、同時に文字も目で追うことをパラレル・リーディングという。読み方とつづりを関連づけて身につけるという目的には、こちらの方が向いていると思う。しかし聴いた単語を目で追いながら、同時に発音もするのは、日本語でも集中力を要するので、外国語でとなると負担が大きいかもしれない。

その場合は、慣れるまでは聴きながら文字を目で追うだけにする。発音する時に CD の音声が高いと感じるようなら、一時停止を挟みつつ発音しよう。この時 CD のようなネイティブ発音ができなくても気にする必要はないが、お手本に近づける努力はした方がよい。最初は途中で詰まってしまうかもしれないが、練習して最後まで言い切れるようになると結構気持ち良いものである。初めは口の中でつぶやくような発音から始めて、徐々に明瞭に発音するようにしても良い。図書館の中など、声を出せない環境なら口パクでも良い。とにかく言語を学ぶときには、必ず音声と文字を結びつけるよう意識することが大事なのである。

このような練習は教科書の付属 CD を使うだけでも十分可能だが、今年度は図書館の書架に、外国語の音読をテーマにした図書が何点か並ぶ予定である。それらを目にした時にはぜひ手に取って、音読を実践してみてほしい。三日坊主で構わない。何もしないよりずっと良い。三日坊主も何度かやればそれなりの日数になる。中断しつつも続けていれば、徐々に効果が出てくるはずだ。

その頃を振り返って

生活科学科 助教 飯田 津喜美

私もどうやら古株になったようだ。そのことを自覚した時に、三重短期大学の歴史を振り返ろうと考えた。平成初期に着任し、令和へ踏み出したこの時期であるからこそ更にその思いを強くしたのかもしれない。開学50周年記念誌編集委員会委員のひとりとして編集に携わったことも思い出したからかもしれない。

4月の入学式には村井学長や前葉市長が三重短大建学の歴史や精神について触れておられたことを1年の皆さんは記憶していることと思う。在校生は、本学ホームページの学長挨拶や大学沿革に目を通していただきたい。

URL：<https://www.tsu-cc.ac.jp/info/gakucho/>, <https://www.tsu-cc.ac.jp/info/enkaku/>

■本学の創立記念日は4月20日

今年の創立記念日を記憶していた人は何人ほどいただろう。かくいう私は、母親の骨折騒ぎで全く覚えていなかった。

大学の沿革は、先ほど紹介したように本学ホームページにも掲載されているが、人目に触れる機会が少ないと推測し、ここで少し紹介したい。すべて書き切れる内容でもない点ご理解頂きたい。

尚、当時の様子については、恩師で本学名誉教授紀中多恵子先生からの伝聞や開学50周年記念誌からの引用で補足説明させて頂こうと思う。

■開学のころー古川校舎時代

「戦災復興はまず教育から」と、津市は、戦後復興のひとつとして教育に力を入れ、勤労青年や女性に対する大学教育の場を求めて動き出した。

1951年（昭和26年）10月 文部省（現文部科学省）に三重短期大学設置認可申請

1952年（昭和27年）2月 三重短期大学設置認可（法経科第2部100名、家政科40名）

同 3月30日 第1回入学試験実施

同 4月20日 開学式及び第1回入学式挙行

・開学時、現津市立西橋内中学校校舎を間借りし、一部は中学校と共用していた。

定員以上の人数が集まり（法経科第2部295名、家政科54名）、教室に入りきれず廊下まで受講学生があふれていたそうである。

1953年（昭和28年） 教職課程設置及び定員変更（法経科第2部180名、家政科60名）

1959年（昭和34年） 第1回中部公立短期大学交換協議会

・中部地区の公立短期大学が集まり、クラブ活動の活性化やスポーツを通して各大学の学生・教職員が交流を深めることを目的としたスポーツ大会である。当初行われた競技は、バレーボール、ソフトテニス、卓球、バドミントンであったが、その後、バスケットボール、硬式

テニス加わった。目的のとおり、県内外の学生と交流することができ、友人の輪が広がったことを記憶している。本大会は、公立短期大学の4年制改組に伴い徐々に参加数が減少していった。2年前まで岐阜市立女子短大と本学との交流会が行われていた。

■栄町校舎時代

1957年（昭和32年）4月 津駅前校舎移転認可（津市栄町三丁目48番地）

・津駅前徒歩5分圏内という非常に交通の便の良い場所に専用校舎を得たが、移転した小学校の校舎跡を利用していたため老朽化により、雨漏りの他、木製の床に穴が開きその穴に鉛筆や消しゴムが落ちたり、ヒールのある靴で歩くとハマり込んだりすることがあったそうだ。

1966年（昭和41年） 学生定員変更（家政科90名）

1967年（昭和42年）12月 現校舎建設着工

・市民の強力な後押しと、学生・教職員の熱い思いがあったと聞く。津駅前改造計画の推進期とも相まって栄町校舎から一身田の新校舎への移転が決まったとのこと。移転運動の様子（写真）は、附属図書館所蔵の三重短期大学開学50周年記念誌を参照してほしい。

■一身田校舎時代

1968年（昭和43年）12月20日 現校舎へ移転（津市一身田中野字蔵付157番地）

1969年（昭和44年） 待望の新校舎での学びが始まる 栄養士養成施設指定は同年1月、法経科第1部設置認可は同年2月（法経科第1部60名、法経科第2部150名、食物栄養専攻100名、被服専攻50名）

1971年（昭和46年） 体育館竣工

1973年（昭和48年） 定員及び専攻名変更（食物栄養専攻50名、家政専攻100名）

1974年（昭和49年） 大学ホール竣工

・当時の大学祭では、美人画が本学の広報役を担っていたといえるだろう。美人画とは校舎棟東（グラウンド）側の1階から4階の約半分を覆うほどの大きさで、張り合わせたビニールシートの上にペンキ等を使って描く手作りの大型の浮世絵である。その年の企画に応じて登場人物が女性、男性と色々である。どちらかという上半身や顔から上を描く「大首絵」風が多かったように思う。

1980年（昭和55年） 研究棟竣工


1982年（昭和57年） 開学30周年

1984年（昭和59年） 地域に開かれた三重短大づくりの一環として地域問題総合調査研究室設置、定員変更（法経科第1部100名）

1990年（平成2年） 家政科から「生活を総合的に捉える」生活科学科に改編し、専攻名変更（食物栄養学専攻50名、生活科学専攻100名）

1992年（平成4年） 開学40周年記念講演会開催

1997年（平成9年） 学科改編（法経科に「法律コース」「経商コース」「行政コース」の3コース、生活科学科生活科学専攻に「生活システムコース」「居住環境コース」の2コースをおく）

- 2002年（平成14年） 開学50周年記念式典・講演会開催、法経科第2部コース制廃止
- 2006年（平成18年） 図書館が管理棟2階から研究棟1階に引っ越し
 ・すさまじい量（約7万冊）の書籍をひたすら“図書館結び”（と私は呼んでいるが）、締まると堅く、ほどけやすい結び方でくくり、分類毎に仕分けて、軽トラックで何往復も書籍を運んだことは、懐かしい思い出である。
- 2007年（平成19年） 法経科第1部を「法律コース」「経商コース」の2コース制に、生活科学専攻を「生活福祉・心理コース」「居住環境コース」の2コース制に改編、学生相談室設置
- 2008年（平成20年） 地域問題総合調査研究室から地域問題研究所へ改組、地域連携センター開所
- 2012年（平成24年） キャリア支援室（TASK ROOM）設置、
 開学60周年事業（記念誌の発行、ロゴマーク制定）

- ・台風により残念ながら記念式典が中止になったことを記憶している。
- 2017年（平成29年） 段階的に縮小してきた教職課程であったが、平成29年度入学生（食栄・栄養教諭課程）を最後に廃止
- 2018年（平成30年） 公益財団法人大学基準協会による短期大学基準適合認定
- 2022年（令和4年） 開学70周年（少し気が早いですが…）

■三重短期大学の理念

校内中庭にある石碑「真理」をご存じだろうか。

この機会に一度探してもらうのもよいと思うが、開学50周年記念事業のひとつとして設置されたものである。1955年に元東京大学総長の南原繁氏が揮毫（きごう）した文字が刻まれている。三重短大は、1 教育研究の理念、2 地域貢献の理念、3 大学運営の理念の3本柱であり、また一度本学ホームページを確認してもらおうとよいだろう。

URL：<https://www.tsu-cc.ac.jp/info/rinen>

今回は、この石碑に関する教育研究の理念をはじめとする3本柱について紹介する。2 地域貢献は、地域で活躍する人材を輩出すること、本学の地域連携センターや地域問題研究所により推進している事業等がこれにあたるだろう。3 大学運営の理念は、私にとっても初心に戻り読み直しておきたいものであった。

1. 教育研究の理念

①真理の探究（知の創造・継承・発展）

教育研究活動を通じて、人類普遍の真理と真実を追究し、世界の平和と人類の福祉の向上、文化の批判的継承と創造に貢献する。

②優れた人材の育成

広い分野の総合的な知識と深い専門的学術を教授研究し、豊かな人間性と高い知性を備え、論理的で自主的な判断能力に加え、応用力や実践力に富む有為な人材を育成する。

高い公共性・倫理性を備え、民主的で文化的な社会の形成に主体的に参画する市民を育成する。

2. 地域貢献

津市の設置する公立短期大学として地域の諸問題や社会の要請に対応した特色ある研究の推進を図り、その成果を積極的に地域に還元するとともに、高等教育に対する地域のニーズに的確に応え、生涯学習の振興に寄与することを通じて、地域社会に貢献する。

3. 大学運営の理念

真理の探究と知の創造にかかわる、自律性と自発性に基づく教育研究活動を尊重し、促進する。大学の自治とは、大学がいかなる利害からも自由に知の創造と発展を行うことを通じて広く人類社会に貢献することができるよう、国民から特に付託されたものであることを常に自覚し、教育研究及び管理運営に関して、主体的に点検と評価を進めるとともに、他者からの批判的評価を積極的に求め、その付託に伴う責務を自立的に果たすべく努める。

引用：URL：<https://www.tsu-cc.ac.jp/info/rinen> 教育情報

■梅の学章由来

梅の学章の由来は、学生便覧の表紙の裏に記載されている。令和の時代が始まり、梅の花にも注目が集まったが、本学の学章も梅の花である。

東西文化の融合により、新しい時代にふさわしい文化を創造しようとする抱負に燃えて、「和魂漢才（わこんかんさい）」で有名な平安時代初期に活躍の文人政治家菅原道真（845－903）の故事に因み、梅花の中に大学の2文字を配した。5弁はそれぞれ、質実・剛健・進取・闊達（かっただつ）・勤勉をあらわし、全体として調和協同の美を示している。

附属図書館には、菅原道真に関する蔵書がいくつかあるので手に取ってみてもおもしろいと思う。

引用：2019年（平成31年）度学生便覧 学章の由来

■過去の歴史と我々

「過去の歴史は関係ない」という学生の声を聞いたことがあるがはたしてそうだろうか。2018年度卒業生を加え、本学卒業生が2万人を超えた。この間の卒業生の方々の努力や頑張りがあったからこそである。何事も先人の働きがあったからこそ今がある。法学しかり、文学しかり、科学、心理、建築どの分野もしかりである。過去を振りかえろうと言っているのではない。これまでの基盤を大切にしながら新しい道に踏み出してほしいという思いなのである。そして私は、もうしばらく卒業生と在校生、卒業生と卒業生、そして大学、地域をつなぐ役割を続けたいと思う。

最後にこの寄稿が学内にあっては学生の皆さんの大学生活の何らかの活性化に役立ち、学外にあっては、三重短期大学に関心を持って頂くための一助となることを祈念している。

【参考文献】

三重短期大学開学50周年記念誌（2004）

津市立三重短期大学開学60周年記念誌・記念論文集（2012）

2019年（平成31年）度学生便覧

三重短期大学ホームページ 2019年9月25日閲覧